

(3月8日)

農協経営分析視角としての 経済効率性の検討

(東北大学) 伊 藤 房 雄

農業の生産効率を高めるには、個別の経営規模が小さい農業分野においては、行政や農協の果たす役割がきわめて重要である。とりわけ地域農業発展に主導的役割を果たすことが期待される農協それ自体としても、経営効率の向上が求められている。

現在、農協組織は、激変する農業情勢に適応し、競争力を強化すべく、組織改革を目標に掲げている。その一つは、「単位農協—県連合会—全国連合会」という系統3段階制の見直しであり、もう一つは、単位農協レベルで数町村にまたがって活動し、規模の経済を発揮できることを目標とした広域合併で、現在その推進が行われている。

しかしながら、公共的な性格の強い農協を評価する場合、功利主義的な効率性のみで評価するのではなく、農協のサービスを受ける農家の側からの公正を考慮することが農協のアイデンティティーを明確にする上でも必要と考えられる。

本報告では、従来の農協理論において効率性概念がどの様に適用されてきたかを検討すると共に、DEA (Data Envelopment Analysis) を適用して、農協のような公共的性格の強い事業体を評価する際に、サービスの受益者からみた公正の視点を加味すると、事業活動評価の分析ツールとしての DEA の内容が豊かになり、その適用可能性が一層高まることを示すための試論を展開することである。

以下、本報告の概念を示す。まず分析に先立って、既存研究をもとに農協理論における効率性概念を検討し、かつ近年それらが功利主義的 DEA として行われていることの問題点を明らかにした。これらの検討を前提に、

公共事業体を評価するための新しい方法として、マクシミンの考え方に基づいた「L 効率」概念を定義し、それをを用いた評価方法を提示した。この方法を宮城県内の農協のデータに適用し、分析を行った。さらに、農協経営のトップマネジメントがどのような要因によって構成されるかについて検討し、それと経営効率との関連について考察した。

(文責・茂 野 隆 一)

(本研究会は、当研究所の農協研究会として行われたものである。)